

◆2021年4月第2週の説教

■日時：2021年4月11日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「わたしは福音を恥としない」

■聖書：新約ローマの信徒への手紙1：16-17（p273）

■讃美歌：17「聖なる主の美しさと」・510「主よ、終わりまで」1番

お早うございます。

先週のイースター礼拝には、遠方の方は出席出来ませんでしたが、それでも今年のクリスマス礼拝以来の豊かな交わりの時が与えられ、感謝でした。立川は、明日から「まん延防止

等重点措置」の適用地域に指定されますが、お互いに健康が守られ、ワクチンの接種が順次始まる時を待ちたいと思います。

ところで、今年の7月5日に、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」との説教題のもと、マルコによる福音書1章1節から始まった講解説教は、先週の「あの方は復活なされて、ここにはおられない」とのイースター礼拝メッセージをもって終わりました。約9カ月の時でした。

私にとって、聖書にある福音書、あるいは使徒たちの手紙などを最初から最後まで集中的に学ぶ講解説教は初めての経験でした。そして、この経験は、当初予想もしなかった恵みを私に与えてくれました。それは、この福音書を書いたマルコが、私たちに何を語ろうとして書いたかが、これまで以上に良く理解出来たからです。

私たちは、1章1節から16章8節まで全てを読み通しました。

今朝は、この福音書に登場する4人の人物を特に取り上げ、マルコが私たちに伝えたかった福音の消息を学ぶ時としたいと思います。

この4人ですが、1人は律法学者です。2人目はペトロ、3人目はローマ軍の百人隊長、そして4人目は最高法院の議員であるアリマタヤのヨセフです。

まず、それぞれが登場する箇所を振り返ってみたいと思います。

始めの律法学者ですが、新共同訳 87 頁、12 章 28 節から 34 節です。

お読みします。

28：彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」

29：イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、私たちの神である主は、唯一の主である。』

30：心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』

31：第二の掟はこれである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」

32：律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。

33：そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。

34：イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

すでにお話ししたように、当時人々が生活する上で守るべき宗教上の決まりは 600 を超えていました。その中で、どの決まりが最も重要なのかと一人の律法学者がイエス様に尋ねたのです。律法学者とは、決まり、即ち掟の専門家です。掟、即ち律法についての彼らの知識の右に並ぶ者はいません。その豊富な知識を持つ男が、イエス様になぜこのようなことを尋ねたのでしょうか。

律法についてのイエス様の知識を試そうとしたのでしょうか？

いいえ。

彼は、真剣に問うたのです。

人々の生活をごんじがらめにする掟の中で、真実に守るべき最も重要な掟は何かを本当に知りたかったのです。

彼のその思いを知ったイエス様は答えます。

掟の中の第一は神を愛することであると。即ち、日々神様に心に向け、神様の御心を尋ね求めて祈り、それによって示された道を歩むことであると。

第二は隣り人を愛すること。即ち、隣り人が負っている困難な課題を見つけ出し、その重荷を自分も引き受けることであると。

イエス様のこの答えに対し、律法学者は「その通りです」と全面的に賛同します。その結果、「あなたは神の国から遠くない」とイエス様に告げられました。

あなたは、「神の国から遠くない」。

あなたは、すぐ近くまで来ている。

律法学者に対するイエス様の賞賛の言葉でした。そして、すぐ近くまで来ている神の国に入るあと一つのこと、それは、告白したその通りに行くことだと私は思いました。

続いてペトロです。

ペトロについて、マルコは多くの場面で記していますが、やはり信仰告白の場面を振り返りたいと思います。新共同訳聖書 77 頁、マルコによる福音書第 8 章 27 節から 30 節をお読みします。

27：イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。

28：弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』という人もいます。」

29：そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」

30：するとイエスは、自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

ペトロは、弟子たちの中でただ一人、イエス様を神様から送られたメシア、即ち救い主であることを告白しました。イエス様と3年間生活を共にする中で、語られた教えや数多くの力ある業を見て、この人こそメシアであるとの確信を抱くに至ったのです。

しかし、すぐ次の場面で、ペトロはイエス様から厳しい叱責を受けます。31節から33節です。

31：それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、3日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。

32：しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。

33：イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

ペトロのキリスト告白とすぐ後に続くイエス様の彼への叱責。

この場面は私たちに信仰について考えさせます。

ペトロの告白は、彼の真実なイエス様への思いでした。

純粹に、真っ直ぐに、イエス様が神様から世に遣わされお方であることを信じての言葉でした。しかし、ここで問題なのは、その真っすぐな思いが、すぐに人間的な思いに取って替わってしまうことです。

十字架と言う、神様から与えられた使命を尊ぶより、そのような辛い目に遭って欲しくないと言う人間的な思いが勝ってしまうのです。

この問題は、私たちの信仰の在り方をも問うています。

日々生活して行く時に、自分の願いを優先させて生きているのか、それとも、神様の示される道を常に尋ね求めながら生きているのかをです。

3 番目に取り上げるのは、先々週学んだローマ軍の百人隊長です。96 頁、マルコによる福音書 15 章 33 節から 39 節です。

33 : 昼の 12 時になると、全地は暗くなり、それが 3 時まで続いた。

34 : 3 時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。

35 : そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。

36 : ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。

37 : しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。

38 : すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。

39 : 百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

イエス様の処刑の指揮を執った現場の責任者です。

彼は、十字架に着けられてから息を引き取るまでのイエス様の様子をつぶさに見ていました。職務上、彼は恐らく何人もの人々の処刑の様子をこれまで見て来ていたのです。しかし、ユダヤ人の王と書かれたこの男の息を引き取るまでの様子は、他の人々と異なるものを感じていました。それが何かについてマルコは記していません。ただ一言、百人隊長をして「本当に、この人は神の子だった」とイエス様が言わしめたことを記録しました。

百人隊長のこの告白は、先のペトロの「あなたは、メシアです」との告白に並びます。

ペトロの告白を導き出したのは、イエス様と何年もの間、寝食を共にした歩みの結果でした。しかし、百人隊長の告白は、わずか 6 時間、イエス様の最期を見届けた経験から与えられたものでした。

ここでマルコが記したのは、人がイエス様と真実に出会うために必要なのは、時間の長さではないということです。そして又、どこに身を置いているかでもありません。

ペトロと百人隊長。イエス様に対する立場も全く違えば、共に過ごした時間も問題になりません。しかし、それらの違いを超えて、マルコはイエス様が神の子であるとの告白を二人に言わせています。敵対勢力であるローマ兵にも、マルコは光を当てたのです。

そして、最後のアリマタヤのヨセフを見ましょう。

同じ頁の 15 章 42 節から 46 節、96 頁です。

42：既に夕方になった。その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、

43：アリマタヤ出身で、身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいたのである。

44：ピラトは、イエスがもう死んでしまったのかと不思議に思い、百人隊長を呼び寄せて、既に死んだかどうかを尋ねた。

45：そして、百人隊長に確かめたうえ、遺体をヨセフに下げ渡した。

46：ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。

国家転覆を図る重罪人として処刑されたイエス様に近づく者はいませんでした。彼と何らかの関わりがあると見做されることは、自分の人生に不利益をもたらすことが明らかであるからです。ところがマルコは、44 節で、弟子たちが全て逃げ去り、引き取り手の誰もいないイエス様を、アリマタヤのヨセフが「勇気をだして」ピラトに引き取りを願い出たと記しています。彼も又、立場から言えば、イエス様を十字架に着けた敵対勢力である議員の一人でした。

このように、すでにお気づきになったと思いますが、マルコが記している今取り上げた 4 人の中で、ペトロを除く 3 人までもが、イエス様を殺そうとしたり、実際に手を下した側にいる者たちです。律法学者であり、百人隊長であり、最高法院の議員です。その彼らにマルコは光をあてているのです。

何故マルコは、あえて光をあて、このように記録したのでしょうか？

その理由は、福音の持つ普遍性です。

第1章1節冒頭に掲げた「神の子イエス・キリストの福音の初め」の福音、即ち良き知らせは、「敵」「味方」を問わず、立場を問わず、この世の出自、性、地位、名誉、階級を問わず、真実を求める全ての人に遍く告げ知らされていることをマルコは書き記しました。

その福音を信じて受け入れるか否か、聴いた者の側に帰する問題であることをもです。

だからこそ、私たちは、時が良くても悪くても、福音を宣べ伝える使命が神様から与えられていることを知らなければなりません。その使命に与らせるために、神様は、私たちをこの地に呼び集めて下さいました。

神様が私たちに与えられているその御業に与るに相応しい者として、整えられ、用いられて行こうではありませんか。

祈りましょう。

#### 【追記】

訂正をします。

前々回の説教で、1911（明治44）年の大逆事件で死刑となった幸徳秋水の葬儀を植村正久が行ったと申し上げましたが、それは間違いで、正しくは、処刑された12名の中の一  
人、キリスト教の洗礼を受けていた大石誠之助の「遺族慰安会」を富士見町教会で開いた  
と言うのが正しいことでした。